

国語教育 第119号

都小国研多摩地区研究会事務局

国語教育が子供たちの豊かな言語生活につながることを目指して

東京都小学校国語教育研究会
多摩地区研究会会長 山崎 尚史
(青梅市立第二小学校長)

東京都小学校国語教育研究会多摩地区研究会（以下 多摩地区研究会）は今年度も多摩地区の国語教育の充実につながるよう、会員と共に研究に力を尽くして参ります。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、都小国研では、令和8年度に開催される全国小学校国語教育研究会東京大会を見据えて、令和5年度から研究主題を「他者と協働し、豊かな言語生活を実現する国語教育」とし3年間で研究に取り組んでいます。その最終年度の今年度は、副主題を「学びを通して身に付けた言葉の力を日常生活に生かそうとする」として研究していきます。これまで取り組んできた「言葉による見方・考え方を働かせる」「身に付けた力を意識し、自ら学びを進める」ことを土台としながら子供たちが国語の授業を通して身に付けた力を生かして日常を豊かなものにする意識を高めていきたいと考えています。

昨年度は、子供たちが国語の授業を通して付けた力が日常生活に生かされていく子供たちにとって「やってみたい言語活動」を工夫しました。そのことを通して子供たちは「国語を学ぶ意味」を実感することができたと考えています。またそれと同時に、子供たちが学びの主体者となるように一歩踏み込んだ授業づくりにも挑戦してきました。具体的には今後、更に重要となる子供たちが選択できる幅を広げることや自らの学習状況に応じて自己調整する学習計画を立てられるような展開を取り入れました。新たな学びの姿です。こうした国語教師の取組や姿勢は未来を担う子供たちの豊かな言語生活をつくることにつながっていきます。

今年度は令和8年度の全小国研東京大会に向けた最終年として更に研究の精度を上げていこうという思いで各部の研究をスタートしました。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

国語は全ての学びを支える教科です。一緒に学びませんか？

多摩地区研究会は、主に多摩地区の学校に在籍し、「国語を学びたい」「国語教育の発展に努めたい」という思いをもつ先生方による研究団体です。「話すこと・聞くこと部」「書くこと部」「読むこと部」の3つの部で構成され、年1回の研究授業に向けて部会ごとの協議会でより良い国語授業づくりについて学び合っています。ベテランから若手まで和気あいあいと取り組んでいます。広い多摩地区での参加がしやすいように、リモート参加もできるようにしています。

11月には「多摩まなび塾」を開催し、部員以外の皆さんにも、素晴らしい講師の先生たちから国語を学ぶ機会を設けています。

機関紙「国語教育」を年3回発行し、研究の成果を発信しています。また都小国研のホームページ中の多摩地区のページの充実にも取り組んでいます。右のQRコードを利用し、アクセスしてみてください。

多摩地区研究会に興味のある方、お気軽に事務局までご連絡ください。国語は全ての学びに使う「話す力・聞く力、話し合う力、書く力、読む力」を育てます。その大切な国語と一緒に学びませんか？



都小国研



多摩地区研究会

令和7年度 都小国研多摩地区研究会 総会報告

令和7年度都小国研多摩地区研究総会が、5月19日（月）青梅市立第二小学校で開催されました。

- 1 挨拶・来賓紹介 都小国研多摩地区研究会会長 山崎尚史
- 2 議事 (1) 令和6年度活動報告 令和7年度活動計画
(2) 令和7年度役員・事務局承認
(3) 新会長挨拶

3 令和6年度活動報告

(1) 話すこと・聞くこと部

「求めて関わり、自他の学びの充実を目指す話し合い」

单元名 「より良いアイデアを目指して話し合おう」～学校の魅力を伝えるCMづくり～

学習材 「みんなで楽しく過ごすために」（光村図書 6年）

6年生が、これまでに培ってきた話し合いの力や、言葉による見方・考え方を活用しつつ、より主体的に学習に取り組めるよう、単元を構成した。目的・相手意識を明確にし、児童にとって必然性のある話し合いとなるように、「新一年生の保護者に向けた、学校の魅力を伝えるCMづくり」という題材を設定した。単元の初めに、既習事項を振り返ることで、児童がこの単元で付けたい力を意識できるようにした。また、3回の話し合いを設定し、前回の振り返りをもとに次の話し合いのめあてをたてることで、効果的に話し合いの力を高めることができた。また、CMモデルや話し合いモデルの映像をあらかじめ提示することで、児童が具体的なイメージをもって考えを練ったり、話し合いに臨んだりできるよう工夫した。

当日の授業では、前時までにグループで決めた「一番伝えたいこと」が表現できるCMになるよう、構成を話し合う活動を行った。テーブルシートを活用することで、どの児童も理由や根拠を伝えながら考えを出し合い、それらの意見を整理しながら、話し合う姿が見られた。協議会では、「話し合いについてのめあてと、話す内容のめあてをどのように整理し、評価したらよいか。」や「クラスで決めた決定条件を、グループの話し合いにどうつなげるか。」などの意見が挙げられた。講師の邑上先生からは、話題の設定が授業の要であること、共有の際は、児童が様々な考えを行きつ戻りつしながら考えを深めていくことが大事であること、形ありきでなく、話をつなぐ聞き手を追求していくことが大切であることなどをご指導いただいた。

（文責 田中 史子）

(2) 書くこと部

児童の深い学びを目指す、主体的・対話的な書くことの単元づくり

单元名 「私たちの防災ガイドで家族を守ろう」～書き表し方を工夫して、自分の考えを書こう～

学習材 「もしものときにそなえよう」（光村図書 4年下）

家族に向けて、防災対策が必要不可欠であるという文章を書く活動を通して、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にしながら、相手に伝わるように書き表し方を工夫する力を高める単元学習を行った。単元の導入で市の防災危機管理課の方から防災に関する講話を聞き、児童は防災への関心や必要感を高め、家族に読んでもらうことを単元のゴールに設定することで、伝えたいことを明確にした文章を書こうとする意欲をもつことができた。また、既習したことを確認できる「作文ガイド」や「振り返りシート」の活用をすることで、学習への見通しと次時へのめあてをもつことができた。さらに、常時活動として二項対立のミニ討論会を実践し、自分の考えを相手に伝えることをより意識する手だてとした。

当日の授業では、2つの構成メモを比較することで、自分の考えとそれを支える理由や事例の整合性がある構成を意識できるようにし、それぞれの進度で構成メモや下書きを書き進めた。自分の考えとその理由や事例とのつながりを意識しながら、真剣に書き綴る児童の様子が見られた。研究協議では、書く活動を安心して自分で進めるための手だてや交流方法について話し合った。講師の成家先生からは、単に資料からの情報を抜き出して構成するのではなく、児童一人一人の体験を中心にして書くことでより豊かな文章を目指せる等、具体的にご指導いただいた。

（文責 末村早希子）

(3) 読むこと部

自立した学習者を育てる読むことの指導

单元名 「これが私の心に染みた 棕鳩十作品」～手がかり・読み方をセルフプランニング～

学習材 「大造じいさんとがん」（東京書籍出版 5年）

自立した学習者を育てるために、これまでの学習経験を生かしながら作品を読み深めることを目指した。そのために「手がかりとする叙述（以後「手がかり」とする）」「読み方」「まとめ方」を自分で選択して自分で読み進めるなど、主体的に学習に取り組むことを重点に研究を進めた。本単元では、「大造じいさんとがん」を読んで心に染みたところを友達と交流するために、皆と話し合いたいことを学習課題として児童自身が設定した。また、既習の学習経験を想起しながら3つの柱「手がかり」「読み方」「まとめ方」に整理した。そして、それらを用いて、学習課題を解決するための学習計画を立て、自分で読み進められるようにした。

当日の授業では、第二次までの学習を活用して、自分の選んだ棕鳩十作品の中で心に染みたところが伝わるように読みの計画を立てて読み進める学習を行った。研究協議では、主体的に学習に取り組む際の教師の効果的な指導の在り方等について話し合った。講師の井出先生からは、文学的な文章を指導するときの改善策「どのように学ぶか」や「教師主導型からの脱却」などについてご指導いただいた。また、主体的な学びを確かなものにするために、全体交流のときに教師が選んだ児童の作品を価値付け（一般化）して子供の理解を補助（翻訳）し、身に付けさせたい力を浸透させていくこと等のご指導いただいた。

（文責 後藤千恵子）

(1) 令和6年度多摩地区研究報告について

○話すこと・聞くこと部

- ・「学校の魅力を伝えるCM作り」は、必然性のある話題設定であった。相手意識、目的意識、場の意識、自己評価、他者評価の仕方が良かった。
- ・既習事項の確認表が児童の学びを深めていた。本単元での身に付ける力の自覚化と自分のめあてをもった学習活動を支援していた。
- ・ICTを活用して学習履歴を残すことで、身に付けた力や学びの振り返りを児童が自覚化できるように蓄積させると良いだろう。高めた話合いの力は、国語科以外の教科でも生かすことができる。

○書くこと部

- ・教科横断的な単元づくりであった。言葉による見方・考え方をどのように働かせるのかを具体的に考え、指導案に明記している点が良かった。
- ・児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して問い直したりして、言葉への自覚を高められるような手だてがあった。
- ・児童なりに身に付けた言葉への見方・考え方を言語化できるようになると良い。「このような見方を使ったらうまくいったな」「どんな見方や考え方を使ったか」を言語化して振り返ると学びが深まる。

○読むこと部

- ・言葉の見方・考え方に迫っていた単元学習であった。「会話文を探す」、「行動が書いてある文を見付ける」などの児童の気付きを促す工夫が良かった。更に、振り返りでどのような叙述に着目したかという「見方」に関しての学びを言語化することで、次の学習へ生かすことができるだろう。
- ・学習課題に即して、どのような叙述（手がかり）に着目し、その叙述を基にどのように読んでいけばよいか「読み方」を考え、学習課題に対して思考していくことができている良かった。
- ・椋鳩十の作品、それまでの学びで高めた見方・考え方を生かした3次であった。

(2) 講演「今年度の都小国の研究の方向について」

研究主題	他者と協働し、豊かな言語生活を実現する国語学習
令和5年度【一年次】	「言葉による見方・考え方」を働かせる学びを作る
令和6年度【二年次】	身に付けたい力を意識し、自らの学びを進める
令和7年度【三年次】	学びを通して身に付けた言葉の力を日常生活で生かそうとする

①豊かな言語生活について

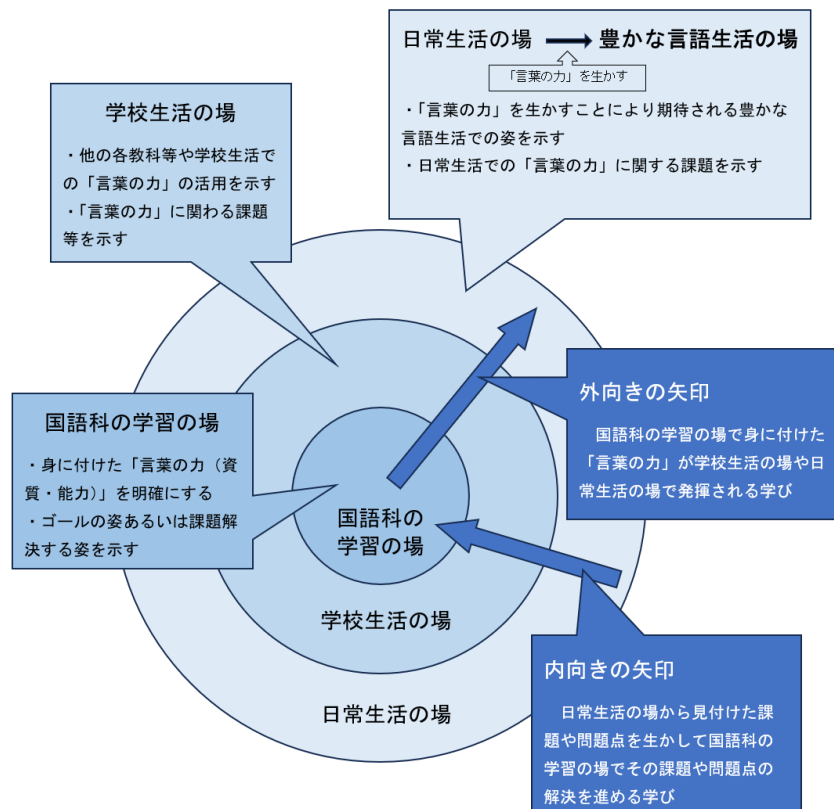
豊かな言語活動とは、言葉を使ってコミュニケーションを円滑に行い、思考や感情を的確に表現できることである。互いに言語で表現し合うことにより、自分の思考は広がったり深まったりすることにつながる。豊かな言語生活の実現によって、児童の思考力・判断力・表現力といった資質・能力が高まり、他者との関係が深まったり、広がったりしていくようにしたい。

②今年度の副主題について

これまでの研究成果を基に、豊かな言語生活の実現につなげていく。次頁の図のように、「日常生活」「学校生活」「学習」として分けて考え、そこで発揮される姿（外向きの矢印）やそこから見付けた課題を生かして課題解決を進める（内向きの矢印）を充実させることが、「豊かな言語活動」につながると捉えた。

児童の学習過程の中で、児童がゴールの姿を目指した時に、日常生活の場、学校生活の場での学びを行きつ戻りつできるようにしたい。「どういった課題を児童自身が見付けることができるか」「往還的な学習過程にするには、どのような単元構想にすべきか」など、外側に向けた矢印について考える必要がある。反対に、日常生活や学校生活から国語科学習の場を設定する内側の矢印を検討したい。単元構想の際、両矢印について想定し、指導案に明記していくとよい。さらに、その単元学習で高める言葉での見方・考え方も具体的に捉え、国語科の目標である言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して理解し、適切に表現する資質・能力を育成することを目指したい。そして、次期学習指導要領改訂に向けて、研究を進めていきたい。

図 「言葉の力」を生かすことで、豊かな言語生活を実現することについて



参考 「豊かな言語生活者を育てる ―国語の単元開発と実践―」 桑原隆 編著

4 閉会の言葉

都小国多摩地区研究会副会長 田村 香代子

令和7年度役員・事務局

会長		山崎 尚史		青梅市立第二小学校 校長
副会長	部長	忍足 留理子	話すこと・聞くこと	府中市立府中第二小学校 校長
		薄井 智美	書くこと	町田市立町田第六小学校 校長
		田村 香代子	読むこと	府中市立府中第七小学校 校長
	副部長	前田 元	話すこと・聞くこと	西東京市立けやき小学校 校長
		所 水奈	書くこと	狛江市立狛江第三小学校 校長
		松井 優子	読むこと	青梅市立若草小学校 校長
事務局長		白倉 裕子	読むこと	府中市立若松小学校
事務局次長		森永 佳代	話すこと・聞くこと	小平市立小平第八小学校
		山崎 由紀子	書くこと	国立市立第七小学校
事務局員		宮崎 弘美	話すこと・聞くこと	小金井市立小金井第二小学校
		飯島 加奈子	話すこと・聞くこと	府中市立若松小学校
		木村 千恵	書くこと	小金井市立本町小学校
		生田 寛昌	書くこと	府中市立四谷小学校
		田中 静香	読むこと	立川市立第一小学校
		後藤 千恵子	読むこと	町田市立町田第四小学校
		八谷 未央	読むこと	東村山市立八坂小学校

【令和7年度多摩まなび塾のご案内】

日時 令和7年11月8日（土） 午前9時15分から12時まで

会場 府中市立府中第二小学校 京王線府中駅下車 徒歩10分南武線府中本町下車 徒歩15分

問い合わせ先 立川市立第一小学校（042-523-4428） 田中 静香